

名古屋 文化情報

2017
9・10
September / October

No. 376
NAGOYA
Cultural
Information

随想／後藤 嘉津幸(能楽幸清流小鼓方) 視点／「中日劇場」
この人と／島津 秀雄(株式会社名演会館代表取締役)
いとしのサブカル／小池信純(ウィルあいち所長)



2017

9・10

September / October

Contents

名古屋市民文芸祭 受賞作品..... 2

随想 能楽と祭りの接点
後藤 嘉津幸(能楽幸清流小鼓方)..... 3

視点 「中日劇場」..... 4

この人と・・・
島津 秀雄(株式会社名演会館 代表取締役) 6

ピックアップ
50周年迎えた「人形劇団むすび座」..... 10

いとしのサブカル
小池 信純(ウィルあいち所長 / 鉄腕アトムコレクター / 熱中凝歴人倶楽部代表)..... 11

おしらせ.....12

「なごや文化情報」編集委員

- 上野 茂 (ナゴヤ劇場ジャーナル編集長)
- 森本悟郎 (表現研究・批評)
- 山本直子 (編集・出版 有限会社ゆいぽおと代表)
- 吉田明子 (人形劇団むすび座制作部長)
- 米田真理 (朝日大学経営学部教授)
- 渡邊 康 (椋山女学園大学教育学部准教授)

表紙

作品

象(かたどる)

(2017年 / 120×90cm) 素材 / 紙に墨

幼少より研鑽してきた書の技術を基に、紙と墨という東洋的な素材と対峙した。古代の漢字をイメージの源泉とし制作した抽象作品。長い時間をかけイメージを作り、一瞬で形にする。新しい時代の美術を吸収し、これからも現代に必要な作品を制作していきたい。



富永 祥烟 (とみなが しょうえん)

1929年 名古屋に生まれる。
1952年より前衛書道団体、墨人会に所属。
55年現美展(大阪)、56年ネオ書道展(アメリカ)などに出品
その後も多数の個展、グループ展に参加。
現在も制作を続けている。

「2016年 名古屋市民文芸祭」
(第八七回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部
川柳の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載していません。

◆市長賞◆ 名古屋市立大森北小学校6年 伊藤 小遥

募金して笑顔の花を咲かせたい

◆市会議長賞◆ 名古屋市立今池中学校2年 中安 茂維

汗にじむ努力の証のユニフォーム

◆市教育委員会賞◆ 名古屋市立駒方中学校2年 服部 優里香

全員の気持ちをつなぐバトンパス

◆市文化振興事業団賞◆ 名古屋市立駒方中学校2年 會田 桃子

火を囲み気付けばみんな肩を組む

◆名古屋短詩型文学連盟賞◆ 東海市立三ツ池小学校1年 手塚 叶愛

しんこきゆうするとぱっちり目がさめる

◆中日賞◆ 名古屋市立天白中学校2年 諫山 耀亮

露天風呂大パノラマを一人占め

随想

能楽と祭りの接点



ごとう かつゆき
後藤 嘉津幸(能楽幸清流小鼓方)

1969年生、横浜国立大学卒。岐阜市在住。
日本能楽会（重要無形文化財総合指定）、並びに公益社団法人能楽協会会員。5歳より先代宗家 故・幸圓次郎、現宗家・幸清次郎および父・後藤孝一郎に師事。6歳にて初舞台。現在までに 乱、石橋、道成寺、翁、卒塔婆小町、鸚鵡小町などを披く。
平成18年 NHK大河ドラマ「功名が辻」小鼓指導。フランス、ドイツ、オランダ、アメリカ、中国、アルゼンチン、チリなど、海外公演にも参加。
平成9年より、能楽「鏡座」同人として10年間活動し、平成16年度名古屋市民芸術祭賞受賞。平成21年新たに「能の旅人」結成。平成27年名古屋市民芸術奨励賞受賞。平成28年度岐阜市芸術文化奨励賞受賞。

私の専門分野の能楽に限らず、古典芸能は元来宗教行事と密接な関係にあり、神に祈りを捧げることを起源としたものがたくさんあります。各地のお祭りはその典型です。

能楽の前身と言われる田楽・猿楽（散楽）も神に祈るところから始まったものでしょうし、お正月などによく演じられる翁・三番叟は現在に至っても第一に神聖さを求められます。

私は小鼓が専門の能楽師で、舞台上では他の楽器（笛・大鼓・太鼓）を演じることはできません。しかし祭りは別で、小学校に上がる前から祭りの指導役であった父に連れられ、岐阜祭の安宅車に乗って太鼓を打っていました。

名古屋を中心とする山車の祭り囃子は能楽から採ったものが多く、派生・伝播していく際に地域によって個性も生まれ、それが伝承されていく中で変化もして、それぞれの味になっています。

能楽師という仕事柄、たまに楽器のメンテナンスや曲の整備を頼まれることがあり、今までにいくつかのお祭りに関わっています（私の原点である岐阜祭安宅車は勿論、加納天神まつり鞍馬車、美濃流し仁輪加、養老高田祭り林和靖軸など）。

後継者不足問題を抱えながらも守っていく信念、崩れてしまった囃子を復元したいという先達への尊敬、ほぼ絶えてしまったものを復活したいという思い、そして何より子供から大人まで関わ

っている人々の笑顔。伝えていくことの難しさを目の当たりにしながらも、地域の誇りを尊重しながらそこにしかない良さを引き出していくことにより、楽しさを実感しています。

去年ユネスコ無形文化遺産にいくつかの祭りが登録され、その中に私が見物客として25年以上通っている半田市の亀崎潮干祭も入りました。長年交流のある潮干祭の方から登録記念の薪能開催のお話をいただき、せっかくだから他にはできない催しをしようということを提案し、いかにして祭囃子やからくり人形が能から派生していったのかという両者の接点に焦点を当てていくことにしました。

主催は祭り保存会ですから催しの企画・段取りははっきり申し上げて素人です。しかしここには皆で催しを作り上げていこうという情熱があり、クラウドファンディングで出資を募るなど、新しい発想も生まれています。前途多難であっても首を突っ込んでいる私はとても楽しいです。勢い余って一緒にグループを組んで活動している「能の旅人」メンバーを巻き込んでしまいました。お互いの力量を信頼しつつ、いい舞台を作り上げていきます。

薪能当日（10月21日）は「能の旅人」だからこそできる能と、潮干祭のからくり人形の競演でお客様にお楽しみいただきたいと思います。

「中日劇場」

劇団四季の「オペラ座の怪人」、レ・ミゼラブル」に代表される東宝ミュージカル、市川猿之助のスーパー歌舞伎に宝塚歌劇…。数々の名舞台を市民に提供してきた中日劇場（名古屋市中区栄4-1-1・中日ビル9階）が2018年3月をもって閉館される。地元新聞社の芸能記者だった私にとって、同劇場は職場であり、娯楽、芸術と触れ合うことのできる至福の場だった。1966年5月にスタートした中日劇場の、半世紀にわたる歴史と作品を振り返る。（まとめ：上野 茂）

中日劇場の歴史と作品を振り返る

長く、名古屋では御園座、名鉄ホール、そして中日劇場の3劇場が集客と演目を競い“名古屋三座”として親しまれてきた。「歌舞伎の御園、ドラマの名鉄、そしてミュージカルの中日」という大まかな色分けもあったが、中日劇場は、東西の舞台で完成された作品を上演するだけでなく、新作の制作や、新たなスターを発掘するなど、さまざまなラインナップを実現してきた。

中日劇場は、全国的にも類のない「新聞社が経営、運営する劇場」である。支配人は新聞社の芸能局長が兼任し、制作スタッフにも、他の劇場にはないチャレンジ精神があふれた。その一例が2001年に自主制作された「友情～秋桜のパラード」であり、コロケ、松井誠、氷川きよしらニュースターの発掘、育成である。また同劇場は「名古屋をどり」「名古屋嫁入り物語」など、地元の舞台人にも門戸を開き“芸どころ名古屋”の発展に貢献してきた。

ザ・ピーナッツ、越路吹雪…懐かしい顔が続々

（1966-75年）

まずは下の写真を見てほしい。これは66年5月5日に、開場記念・こけら落とし公演として行われた「ザ・ピーナッツ・ショー」の、パンフレット（A4・裏表）の表面（一部）である。なんとも質素なパンフレットである。裏面には共演者として田辺靖雄、世志凡太、ザ・ドリフターズ、スマイリー小原の顔写真が掲載されている。年長者には懐かしい顔ぶれである。

この年は劇団四季「オンディーヌ」、越路吹雪・高島忠夫のミュージカル「南太平洋」、地元の川崎会（民謡）、箏曲正絃社（箏・三味線）、未来座（演劇）などの公演、発表会が行われた。

67年には、あのベンチャーズが来演。牧阿佐美バレエ、越智インターナショナルバレエなどのバレエ公演も行われた。68年に



ザ・ピーナッツ

は民藝が「ヴェニスの商人」を上演。中村紘子（ピアノ）やザ・タイガースのコンサートも。

69年には前進座、民藝、文学座、劇団四季など、東京の大手劇団が勢ぞろい。70年にはポリシヨイバレエが、72年にはパリ・オペラ座バレエが来演している。74年には劇団四季が初の本格ミュージカル「ウエストサイド物語」を上演。ミュージカル時代の到来を予感させた。



友情(Wキャスト秋桜組) 2001.8

中日劇場では劇団四季、東宝、宝塚がこぞってミュージカルを上演したが、観客が終演後にルーティーンとして行うのが“出待ち”。中日ビル1階のエレベーターホールには、人気俳優を見送るファンが群がった。「当初はもみくち状態でしたが、年を追うごとにマナーが向上し、整然と並んで出待ちするようになりました。宝塚の影響ですね」と劇場スタッフ。

「オペラ座」 「レミゼ」 ミュージカルの時代へ

（1976-85年）

76年には、中日劇場の看板作品となるミュージカル「屋根の上のヴァイオリン弾き」（主演：森繁久彌）、空前の“ベルバラ”ブームを巻き起こした宝塚花組の「ベルサイユのばら」、78年には宝塚月組が「風と共に去りぬ」で本領。

82年には榊原郁恵主演の「ピーターパン」が登場。宙を飛ぶ“フライング”が大きな話題になったが、「危険が伴うので、公演中

は気が気でなかった」とスタッフは回述する。

83年からは加藤登紀子の「ほろ酔いコンサート」が始まった。この公演は現在まで続いている。



加藤登紀子

〈1986—95年〉

86年には森光子の代表作「放浪記」を初演。“下町の玉三郎”こと梅沢富美男が初お目見え。市川猿之助のスーパー歌舞伎「ヤマトタケル」が反響を呼んだ。88年にはミュージカル「レ・ミゼラブル」（主演：鹿賀丈史・滝田栄）が登場。90年12月20日には劇団四季の「オペラ座の怪人」が初演され、翌91年4月7日までロングラン上演された。いよいよミュージカル時代の到来である。



名古屋嫁入り物語 1996.10

自主制作「友情」が大きな反響

〈1996—2005年〉

96年には山田昌&植木等による「名古屋嫁入り物語」、97年

には国立モスクワ音楽劇場バレエが「くるみ割り人形」を上演した。再演時の「名古屋嫁入り物語」には、公にはならなかった“事故”があった。本番中自転車に乗った植木等が、自転車ごと舞台から転落したのだ。幸い植木にけがはなかったが、観客は演出だと思いきや大笑い。山田昌が巧みに場をつなぎ、事なきを得たという。

99年は、ものまねのコロッケの初座長公演。2000年には大衆演劇の松井誠が初登場。中日劇場の新たな看板になった。01年にはミュージカル「エリザベト」初演、そして中日劇場の35周年記念公演として自主制作された「友情」が公演され、大きな反響を巻き起こした。同作は白血病に侵された女子中学生とクラスメートとの愛と友情の物語。40人の中学生には地元の若い俳優が抜擢され、男女とも頭を丸刈りにして奮闘した。

03年には演歌の新星・氷川きよしが舞台デビューを飾った。チケット発売日には長蛇の列ができ、公演中は中高年の女性客があふれた。

“名古屋三座”から“オール名古屋”へ

〈2006年以降〉

このころから、全国の劇場で「スター不在」が指摘されるようになった。ミュージカル以外に、1カ月公演を行えるスターが激減したのだ。言い換えれば、娯楽が多様化し、ファンの劇場離れが始まったのである。たとえば2014年、1カ月公演を行ったのは1月のコロッケ、2月の宝塚宙組のみで、3月以降は実に40公演が行われた。これでは劇場運営は立ち行かない。

2018年4月には新御園座が幕を開ける。中日劇場の一部スタッフは御園座に移り“オール名古屋”として芸どころの発展に力を注ぐ。半世紀に渡り、東海地区の人びとに愛され親しまれた中日劇場は、観客、出演者、スタッフの夢とロマンを混えて幕を閉じるのである。

（資料提供・中日劇場）

開場35周年を記念して制作された平松礼一画伯の緞帳「ジャポニスムの旅：モネの池に桜」



この人と...



株式会社名演会館 代表取締役

しま づ ひで お 島津 秀雄さん

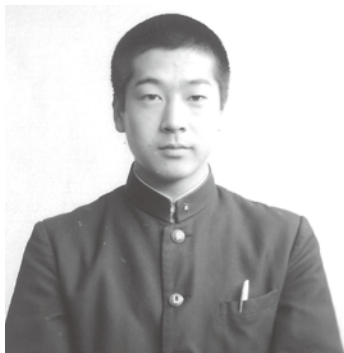
演劇と映画を支え続ける名演会館とともに

名古屋市民芸術祭で「わが故郷は平野金物店」が上演されたとき、東奔西走する島津さんの姿が印象に残った。1998年のこと。その後、芝居から映画への大転換を成しとげた名演小劇場へはときどき通っていた。取材の日、島津さんはたくさんの写真と資料を準備して待っていてくださった。そして、生き生きと紡ぎだされる話の9割は演劇について。仕事の現場が学びの場でもあった島津さんの話は尽きなかった。

(聞き手：山本 直子)

高校の教師の勧めで名古屋演劇鑑賞会へ

1947年10月19日、名古屋市千種区で9人兄弟の末っ子として誕生。陶器の絵付けをしていた父は、島津さんが10歳のときに亡くなっている。その後、家計を支えたのはすでに成人していた兄たちだった。



高校時代

1966年の高校卒業時、進路を決めようとしていたときに、名古屋勤労者演劇協議会（現名古屋演劇鑑賞会）の会員だった国語の教師たちに「君は演劇が好きそうだから、事務局員になったら」と声をかけてもらったのがすべての始まり。演劇がただで観られるならいいかというくらいの考えで、仕事の内容も団体の性格も知らないままに、委員長だった水野鉄男氏らの面接を受けて勤務することになった。

最初に配属されたのは受付。この受付の仕事の大変さには驚いた。公演のたびに8,000枚のチケットを手づくりしな

ければならない。1枚ずつ座席番号のスタンプを押すのだが、少しでもかすれたりゆがんだりすれば、一緒に作業をしているチェッカーから厳しい指摘が入る。へとへとになって夜を迎えると、仕事を終えて会議のために集まってきた会員たちに「俺たちも会社で仕事をして疲れているのだから、疲れた顔を見せるな」とびしゃり。18歳の島津青年は、飲み会では端っこの席でジュースやお茶を飲みながら、先輩たちの舞台の感想や会の運営についての議論に耳を傾けていた。

「炎の人 ゴッホ小傳」

島津さんが初めてかかわった例会作品は、1966年4月の文化座公演「炎の人 ゴッホ小傳」。主演は森幹太。愛知文化講堂と名古屋市公会堂で開催した。島津さんは公演当日も会場を行ったり来たりと忙しい。名古屋市公会堂での公演で、舞台の裏を下手から上手へ抜けるときに、修道服のような衣装を着た看護師役の女優が、出番待ちで、じっと窓から外を見ている姿が今も鮮烈に浮かんでくる。役に集中しようとする様子が18歳の島津青年にとってはとても神秘的に見えたのだ。

そのころ演劇界は急成長していた。名古屋演劇鑑賞会の



「炎の人 ゴッホ小傳」プログラム

会員もどんどん増え、1968年には最大の9,200人となった。事務局員も増えたので、組織担当に異動。地域ごとの学習会や鑑賞後の感想を語る会に参加し、レクリエーションの企画、運営を援助し、会員拡大のために紹介された職場や労働組合、学校の演劇部顧問を訪問し

入会をすすめるのが仕事になった。朝から晩まで会員拡大のためにあちこち動き回り、土日には運営会議。生活のすべてが演劇鑑賞会とのかかわりだった。

そして、記念講演の講師や演劇人の送迎も担当するようになり、会場や駅、ホテルまでのわずかな時間が楽しみになった。すでに多くの方が鬼籍に入られているが、島津さんはここで多くのことを学んだという。

会報でよみがえる演劇隆盛時代

1966年当時、鑑賞会はB5サイズで24ページの会報を毎月出していた。例会作品を3か月にわたって紹介し、サークル訪問、地域ごとの催事、出演者の楽屋訪問、誌上演劇講座、例会総括などが満載で、読み返すと当時の状況が生き生きとよみがえるという。

例会作品の学習会は毎月行われるようになり、千田是也氏、大垣肇氏、堀田清美氏、岩淵達治氏、八田元夫氏、毛利三彌氏、河原崎国太郎氏、広渡常敏氏、小田島雄志氏、増見利清氏、ふじたあさや氏、宮崎宏一氏、木村光一氏、渡辺浩子氏、瓜生正美氏の講演、作品の背景などについては新村猛氏、真下信一氏、土方和雄氏、島田豊氏、吉田千秋氏をはじめとした講師陣が語った。

各年度の総会では、1963年から滝沢修氏、杉村春子氏、木下順二氏、村山知義氏、小沢栄太郎氏、小田健也氏、大橋喜一氏がそれぞれ講演し、その後も毎年継続していった。

労演講座も開催

していて、第1回のこばやしひろし氏「演劇について」以降、茨城憲氏「戦後の演劇状況と戦後の演劇史」、杉山誠氏「近代劇」、菅井幸雄氏「観客組織の創造性につ



「名演」1966年4月号

いて」、阿部文勇氏「労演運動の歴史」、川述文男氏「労演サークル活動」、八田元夫氏「演出の仕事」、倉林誠一郎氏「観客組織の歴史と劇団」、尾崎宏次氏「新劇」と続いた。

会報上では演劇講座として、八田満穂氏「マスコミと演劇」、宮本研氏「演劇と観客」が各2回掲載された。

ミラノ・ピッコロ座観劇の旅



旧映画館を利用したミラノ・ピッコロ座

事務局での仕事が組織から機関誌宣伝担当に代わり、勤めて6年目を過ぎたころに、体系的な学習をしないまま忙しく日々が過ぎていくことに不安を感じるようになったという。ちょうどそのころ、大阪労演が「ミラノ・ピッコロ座観劇の旅」を企画した。島津さんは退職を覚悟して事務局長に2週間の休暇を願い出て、その旅に参加。演劇雑誌にミラノ・ピッコロ座が紹介され、ジョルジョ・ストレーレルの演出が話題になっていたころのこと。

数日間のミラノ滞在中、アポイントなしでピッコロ座の事務所を訪ねたところ、劇場内と写真撮影用のスタジオ、開幕前の「リア王」の舞台セットを見せてもらい、エルネスト・ロッシ氏から説明を受けることができた。ピッコロ座は旧映画館を利用した劇場で席数400名前後、舞台は小さく、高さも舞台そでもなく、廊下や階段が楽屋になっていた。島津さんたちはそこで末娘コーディリアと道化の二役を演じたオッタヴィア・ピッコロさんの挨拶を受ける。「山猫」「わが青春のフロレンス」のスクリーンで見たオッタヴィアさんが目の前で話しかけてくれて感動。

翌日の夜は「リア王」を鑑賞。イタリア語のセリフだからわからないよと同行者と話していたが、前年11月に観た俳優座の「リア王」の舞台を思い出しつつ、劇団による舞台の違いを楽しんだ。そして、小劇場での演劇の魅力も再発見した。帰国して空港に着くとすぐ、尾崎宏次氏に、「コーディリアと道化を同じ俳優が演じていました」と報告。「いい舞台を観たね」と言われた。このミラノ・ピッコロ座での観劇経験が刺激になって、島津さんは名古屋演劇鑑賞会に18年間勤務することができた。

忘れられない乗鞍集会



500人以上が集った1982年8月の乗鞍集会

名古屋演劇鑑賞会は上演前の学習会と上演後の感想を話し合う会に力を入れていた。手ごろな会議室がないころは寺や神社を借りて地域ごとに集った。会員の勤め先は製鉄所、銀行、新聞社、生命保険会社、証券会社などとさまざまで、今でいえば異業種交流会のようなもの。男女の出会の場でもあった。

1975年からは、「サマー・セミナー」も開催した。最も印象に残っているのが、1982年の乗鞍集会。テーマは「いま、演劇は何を」。乗鞍高原一帯で、東海北陸ブロック、関信越ブロックおよび地人会共催で行った。

演出の木村光一氏の提案で、2年ほど前から「母たち」をテーマにした6人の作家と6人の女優によるひとり芝居の上演を企画していた。乗鞍集会を前に「アーノルド・ウェスカー名古屋講演会」が行われ、「母たち」のなかの「四つの肖像」(A・ウェスカー作 広渡常敏演出 大塚道子出演)、「化粧」(井上ひさし作 木村光一演出 渡辺美佐子出演)、「還りなん いざ」(岡部耕大作 石沢秀二演出 藤田弓子出演)を名駅前中小企業センターで上演した。東京公演では、他の3作品、「乳病み」(水上勉作 栗山民也演出 神保共子出演)、「母(オムニ)」(呉泰錫作 鈴木完一郎演出 李礼仙出演)、「花いちもんめ」(宮本研作 早野寿郎演出 萩尾みどり出演)を上演している。

乗鞍集会には、5人の作家(参加できなかったのは井上ひさし氏)、6人の演出家、6人の女優が一堂に会し、会員をふくめて参加者は500名を超えた。このとき島津さんは、会場や宿の下見にはじまり、参加するゲストの調整、緊急連絡の受付、当日のキャンプ用の肉の手配まで忙しく働いた。

小劇場運動を背景に名演会館落成

名古屋演劇鑑賞会の例会公演は主に愛知文化講堂と名古屋市公会堂で行われていた。席数はどちらも1,500前後と大きい会場だ。しかし、演劇界の流れとしては、300~400席の小さな劇場が目立ち始め、名古屋演劇鑑賞会も自前の劇場を求める気運が高まっていた。1968年に会員が



建設中の名演会館

9,200人に達すると、翌年2月の総会で、15周年記念事業の一つとして「名演会館の建設」を決定。さっそく株式会社名演会館を立ち上げ、幅広い出資、カン

パ活動を繰り広げた。その結果、株主が2,000人、協力者は5,000人を超えた。当時、演劇関係者が宿泊していた「旅館丸花」が閉館することになり、その跡地に建設が決まった。1971年、名演会館が完成。1972年2月に名演小劇場例会として、青年座の「禿の女歌手」「椅子」を取り上げた。また、地元劇団公演の全作品を特別例会に決定。1月から3月にかけて、劇団名俳「迷路」、劇団つむぎ座「女の議会」、劇団はぐるま(岐阜県)「フェードル」、劇団名古屋「セールスマンの死」、劇団すがお(三重県)「ぜんそくの街から」、劇団演集「初恋」、劇団名古屋芸術劇場「熊・創立記念祭」の公演を行った。

名古屋演劇鑑賞会から名演会館へ



ぎっしり詰まった演劇関係資料(名演会館2階)

名演小劇場ができてからの舞台上で印象に残っているのは、1977年の「冬の棺-古河力作の生涯」(水上勉作)。木村光一氏を演出に招き、地元演劇人により上演した。このときは、作品の背景を知ろうと参加者を募ってバス2台を連ねて福井県の小浜まで行った。主人公となる古河力作の故郷を訪ねたのだが、見逃してしまいそうな小さな墓に、大逆事件で刑死した力作に対して微妙な雰囲気があることを肌で感じた。

島津さんは1984年から株式会社名演会館に勤務。翌年には代表取締役役に就任した。そのころの名演小劇場では、名古屋演劇フェスティバル、海外演劇シリーズ、海外人形劇シリーズ、年8回の名演寄席、人形劇団むすび座と提携したお正月人形劇場、春休みこども劇場、夏休みこども劇場、

冬休みこども劇場、名作映画シリーズと多彩な催しを開催していた。しかし、映画に力を入れ過ぎると、利用者からは「芝居をやれ」と叱られたりしたという。

1986年、劇団夢の遊眠社の「宇宙蒸発」を中小企業センターで上演して大きな話題となった。文学座、俳優座、民藝、文化座、前進座といったこれまでの劇団に加えて、東京の若手劇団を招致する「NAGOYAニューウェーブ・シアター」を企画。島津さんは新宿紀伊國屋の裏にある小劇場シアタートップスに通い、その1階の喫茶店で、1時間刻みで劇団関係者と交渉し、多くの東京の若手劇団を名古屋に招いた。劇団鳥獣戯画、素人会議、遊◎機械／全自動シアター、田山涼成プロデュース、花組芝居、第三エロチカ、劇団ショーマなどが名古屋で公演し、この企画は1987年から8年間続いた。

名古屋市民芸術祭

1990年代は、1992年の愛知県芸術劇場オープニング演劇祭、1993年の世界劇場会議と、大きな催しが続いた。ニューウェーブ・シアターが認められ、島津さんは「ドラマ・フェスティバル93/94」、1995年からは、ひとり芝居の演劇祭と銘打った「アクターズ・フェスティバルNAGOYA」などに参加した。

名古屋市民芸術祭の主催事業に企画委員として初めてかわったのは1993年。「やっとかめ探偵団」（清水義範原作 伊豫田静弘・岩川均演出 菊本健郎脚色）を名古屋市芸術創造センターで上演し大評判となった。

1998年には「わが故郷は平野金物店」（内藤洋子作はせひろいち脚本・演出）を太白文化小劇場、名古屋市芸術創造センター、西文化小劇場の3会場で上演。早くに両親を亡くした姉弟が、商店街にある金物店でがんばる物語であることから、太白と西での公演を設定。島津さん自身が地元の商店街に足を運んで、商店街をあげて文化小劇場での芝居を盛り上げてもらう雰囲気づくりにも力を入れた。文化小劇場を核として、若者からおいしいちゃん、おばあちゃんまでが気軽に集まることができる空間をつくる必要がある



企画委員として参加した名古屋市民芸術祭主催事業

と、島津さんの言葉には力が入る。

2000年には「飢餓海峡」（水上勉作 木村光一演出）を名古屋市青少年文化センターで上演。

演劇から映画へ



演劇と映画の殿堂となった名演会館

1990年代からは「文化の時代」のかけ声とともに全国的に公立施設や民間小劇場が増え、名古屋でも、1992年に愛知芸術文化センターが開館し、名古屋市の文化小劇場、民間のホールが急速に増えた。劇団も大きな会場で古典を演じるのではなく、自分の作品を自分で演出して、小さな会場で上演するようなスタイルが目立つようになってきた。

名演会館は1998年前後には、それまで年

間30作品近くあった主催事業をやめることにして、スタッフも減らした。その後、5年近くは貸し施設営業のみで呻吟していた。2002年12月、映画「ノーム・チョムスキー」を2週間にわたって上映した。これが思いのほか評判が良かった。2003年は、金・土・日曜日に演劇、月・火・水・木曜日は映画と、曜日によって分けてみた。映画は18作品を上演して31,000人の入場者があった。しかし、週末に上映できないと配給会社はあまりいい顔をしないので、2004年からはホールの貸し出しをやめざるを得なかった。ちょうどそのころ、映画配給会社、映写機会社を退職した人たちと出会い、運営方針を映画中心に変更することにした。演劇から映画へと転換した名演小劇場では、たくさんの建設協力者の意に沿えるように、名作や名画といわれるものを上映している。一言でいえば、「めざすは岩波ホール」。2004年以降、入場者は毎年5～8万人を数え、延べ100万人を超えた。シネサロン友の会の会員も1,000人を超えている。

1960年代に名古屋演劇鑑賞会の例会で知り合って結婚し、70歳代になって再び映画を観に来館する夫婦も増え始めた。演劇と映画、どちらも人と人を現実的につなぐことができる。インターネット上でのつながりに物足りなさを感じ始めた人たちが、豊かな生き方を求めて劇場にもどってきていると、島津さんは力強く話を締めた。

ピックアップ

50周年迎えた 「人形劇団むすび座」

継続は「力」。「力」とは忍耐と努力、そして夢を描き続ける心である。

「人形劇団むすび座」（代表・柿内尚生）が創立50周年を迎え、このほど名古屋市文化振興事業団の第33回芸術創造賞に選出された。まさに歴代、現役座員の「力」が評価されたのである。

むすび座は1967年、丹下進と田中寛次の2人によってスタートした。「地域の子供たちに、生の舞台、手作りの人形劇を見せてあげたい」。それが2人の活動の原動力となり、劇団の「力」になったのである。



〈上〉むすび座「アラビアンナイト」
〈右上〉「名古屋心中」主催:愛知人形劇センター 企画:木村繁
制作:中康彦(人形劇場ひまわりホール) 写真:清水ジロー

緑区大高町にある「むすび座」にうかがった。スタジオでは50周年記念公演「チト」の稽古が行われていた。演出の福永朝子を筆頭にするスタッフ陣、俳優（人形遣い）たちが動きを確認しながら脚本を読み解いている。

人形劇に使用される人形の形態はまちまちで、立体感あふれる精巧な人形もあれば、板に描かれただけの簡素な人形もある。大小もさまざまだ。

どのキャラクターを、どんな人形にするのか。「むすび座」ではスタッフ、キャストが稽古を通してディスカッションを繰り返し、作業を進めている。彼らの表情は明るく、笑い声が絶えない。各自がアイデアを出し合い、全員がそれ



人形劇団むすび座

について考える。それがむすび座の日常なのである。

「むすび座」は創立当初から、会社組織の劇団づくりを目指した。つまりスタッフ、キャストは「社員」であり、劇団から毎月給料をもらっている。もちろん劇団の運営は容易ではない。

ある団員は「給料といっても世間的には最低ライン。結婚し、子供を育てるには、それなりの覚悟が必要でした。しかし人形劇を通して、子供たちに感動を与え、社会に疑問を投げかけることのできる充実感は金銭には代えられない。定年まで勤めるつもりです」ときっぱり。

少子化が進み、劇団を取り巻く状況は厳しい。しかし「むすび座」には、幾度も困難を乗り越えてきた知恵と勇気がある。夢を描き続ける心がある。劇団の歴史を刻み続ける「力」があるのである（文中敬称略）。（U）

芸術創造賞について

芸術創造賞は、名古屋市文化振興事業団の初代理事長・故亀山巖氏から受けた寄付を基金とする賞です。名古屋を中心に活動し、前年度における芸術創造活動が特に顕著で、今後の活躍が期待される個人または団体に事業団から授与するものです。

いとしの サブカル

アトムたちが ナゴヤドームを埋め尽くす日

ウィルあいち所長 / 鉄腕アトムコレクター / 熱中凝歴人倶楽部代表

こいけ のぶずみ
小池 信純

1960年、名古屋市生まれ。1981年、講談社「ヤングマガジン」月間漫画新人賞入選。2002年、文芸社「アトム・ジェネレーション」(エッセイ)発表。その後、様々な雑誌・新聞・テレビ・ラジオで紹介され、2006年以降は全国各地でコレクション展やトークショーを開催している。

サブカルチャー・ポップカルチャーという言葉がいつ生まれたのかは定かでないが、1963年に始まった日本初の連続テレビアニメーション「鉄腕アトム」に魅了された僕は、純粋な心を持ち正義感溢れるポップでキュートなアトムと共に育ってきた。7歳の頃には、既にアトムの水筒を持って得意げに京都の清水寺でポーズをとる写真が残っている。その頃から僕は鉄腕アトムコレクターだったのだ。だとすれば、今年には記念すべきコレクター歴50周年ということになる。フィギュアからおもちゃや雑貨に至るまでアトムコレクションの数は約1万点になる。何と言ってもアトムはMade in Japanの代表的なキャラクターであり、その存在は日本のアニメ文化を確立し、クールジャパンの基礎を築き、ロボット開発の方向性を示し、様々な世界で活躍する人々に大きな影響を与え続けてきた。

現在、僕が名古屋市東区にあるウィルあいち(愛知県女性総合センター)の所長として、施設の運営やイベントの企画に携わっているのは、やはりこの趣味の影響が大きい。2006年から始めた全国各地でのアトムコレクション展示は、16都道府県30都市50回以上に及ぶ。イベントに参加する立場でありながら、イベントを企画する仕事に就いたことは必然と言えるかもしれない。2014年、名古屋で開催したアトム展では、CBCラジオ「聞けば聞かほど」のパーソナリティである、つボイノリオさんがお越しになりアトム談義で大いに盛り上がった。つボイさんも筋金入りのアトムフリークで、この展覧会の模様を番組内でも詳しく特集していただいたほどだ。僕たちの世代にとってはアトムの存在自体が共通のカルチャーなのだ。

僕には、もうひとつ「熱中凝歴人倶楽部(ねっちゅうコレクタークラブ)代表」という肩書がある。

様々なイベントでアトムコレクションを展示していると、たくさんのコレクターや熱中人に出会う。ある時、そんな熱い趣味人を一堂に集めたら面白いのではないかと思い、2010年に僕が代表として発足したのが前述の倶楽部である。ロボット・プラモデル・トミカ・フィギュア・ディズニー・手塚治虫・レコード・映画ポスター等の凄まじい収集家やマニアたち、戦車を1/1で作ってしまう強者、本物の鉄人28号完成を目指す大学教授、ジオラマ界の第一人者やミニチュア・フィギュアのクリエイターたち、オリジナル曲をCDリリースしてしまう会社役員、自作の紙芝居を夜の街で演じる住職、そして何故か業界人が多い乗り鉄・撮り鉄・時刻表鉄まで、名古屋を中心に活動するジャンルを越えた会員は今や120名以上になる。倶楽部の名誉会長には、僕が以前から親しくさせていただいている世界的なコレクターでプリキのおもちゃ博物館館長の北原照久さんをお願いした。北原先生も認めるこのメンバーで、いつかナゴヤドームを貸し切り、「サブカル・ポップカル大博覧会」開催を夢見て、僕も日々「鉄腕アトム」を集めているのである。



人形浄瑠璃 文楽

人形浄瑠璃「文楽」は、日本を代表する伝統芸能の一つで、太夫・三味線・人形が一体となった総合芸術です。太夫の語り、三味線の音色、3人遣いの人形で複雑なドラマを表現します。

解説では、文楽のあらすじを出演者がわかりやすくお話しし、みどころをお伝えします。今回の公演も、電光表示パネルを舞台下手脇花道に設置し、初めて鑑賞する方でもお楽しみいただけるように字幕を表示します。

- ◆日程 **2017年10月6日(金)**
 - ◆開演 昼の部 14:00 夜の部 18:30
 - ◆会場 **名古屋市芸術創造センター**
 - ◆料金 [全指定席] 一階席 一般 4,700円 友の会 4,200円
二階席 一般 2,900円 友の会 2,400円
- ※未就学児の入場はご遠慮ください。



写真:青木信二

演目	かつらがわれりしのしがらみ 桂川連理柵	そねざきしんじゅう 曾根崎心中	近松門左衛門=作 野澤松之輔=脚色・作曲
	ろっかくどう 六角堂の段		いくたましゃぜん 生玉社前の段
	おびや 帯屋の段	てんまや 天満屋の段	
	みちゆきおぼろ かつらがわ 道行朧の桂川	てんじんのもり 天神森の段	澤村龍之介=振付

- チケット取扱い**
- 名古屋市文化振興事業団チケットガイド TEL:052-249-9387(平日9:00~17:00/郵送可)
そのほか事業団が管理する文化施設窓口(土日祝日も営業)でもお求めいただけます。
 - チケットぴあ(Pコード:459-699)TEL:0570-02-9999
※サークルK・サンクス、セブン-イレブン、中日新聞販売店でも直接お求めいただけます。 ※チケットぴあでは手数料等が必要になります。

主催 公益財団法人名古屋市文化振興事業団/公益財団法人文楽協会

頼もしい味方をお探しですか？



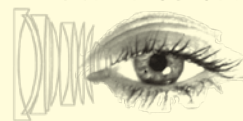
集客・販促プランナー アートディレクター 印刷コンサルタント

株式会社 駒田印刷株式会社 TEL(052)331-8881

〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 <http://www.kp-c.co.jp>

舞台映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ハイビジョンで撮影し
ブルーレイディスクでお渡しします。



ビデオソフトの企画制作

有限会社 **エーワン・ビデオ・システム**
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

MP MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ

〒464-0850 愛知県名古屋市中区千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
TEL(052)735-3151 FAX(052)735-3152 E-mail:mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネージメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

20Hz ← → **20kHz**

A&V
PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK
舞台音響/映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市中区千種区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909